

# 地域語からみた自称詞における性差再考

高橋 美奈子

## 1. はじめに

日本語には他言語に比べ、実に多くの人称詞があると言われている。渡辺(1996)は、このような多彩な人称詞について、ある外国人のエピソードを挙げ、日本の作家は特定の人称詞を登場人物に使わせるだけでその人物の属性を事細かに表現できる便利さがある一方で、複雑な人間関係においては適当な人称詞が見つからない不便さもあると述べている。中村(2007)では、こうした不便さの一因が、日本語の人称詞、特に自称詞は<女><男>といった特定のジェンダーイデオロギーと結びついてしまっているため、それ以外のアイデンティティーを表現しにくいことによると指摘している。中村のこのような視点は、従来、女性が「あたし」のような「女ことば」を使うのはその人が「女だから」というように、人がそれぞれの属性に基づいて言語行為を行っているという「本質主義」的な考え方によるのではなく、「あたし」や「ぼく」のような「女ことば」「男ことば」を言語資源として捉え、これらの材料を利用した言語行為によって自分のアイデンティティーを作り上げるという「構築主義」の考え方による。たとえば、少女が「男ことば」である「おれ」や「ぼく」を使うのは、そもそも日本語には<女性性>を最も強く示す「あたし」や、<大人の女性>を表明する「わたし」、あるいは<子ども>を表す自分の名前にチャン付けの「〇〇ちゃん」という自称詞しかなく、<女>でも<子ども>でもないアイデンティティーを表現する言語資源がないゆえに、新たなアイデンティティーの創造として「おれ」や「ぼく」という言語資源を使うと中村では説明している。

しかしながら、「あたし」や「おれ」、「ぼく」といった「女ことば」「男ことば」を表す自称詞は、標準語の言語資源の一種である(中村2007)。では、標準語ではない地域語を主流とする社会では、特定の人物カテゴリーと結び

ついてしまっている自称詞を言語資源として、地域語社会の一構成員である自身のアイデンティティーをどのように表現しているのだろうか。

本稿では、日本語の中でも本土と対立する唯一の言語を持つとされる沖縄県の中高生による自称詞の使い分けの意識調査から、地域語における言語資源としての自称詞の特徴を明らかにし、これまで標準語のみで語られることの多かった日本語の自称詞における性差について考察することを目的とする。

## 2. 調査概要

### 2.1 調査対象者

本稿では、中村(2007)が言うところの、「女ことば」で表明されてしまう<大人の女性>でも<子ども>でもない少女と呼ぶ年齢層、つまり現在ある日本語の自称詞が自らのアイデンティティーを表現するための言語資源として十分に機能していない世代である中学生と高校生を対象にする。

また、地域語を母語とする生徒が標準語の言語資源である日本語の自称詞をどのように選択するのかを明らかにするため、日本語のなかでも最も固有の方言を持つとされる沖縄県の中高生を対象にした高橋(2005a)の調査報告書の調査結果を用いて調査分析を行う。本稿では、同調査報告書より、中学校と高等学校の生徒を対象とした自称詞の調査に限定して論述する<sup>(1)</sup>。同報告書での調査対象地域は、沖縄県全域の主な方言区画に配慮して、国頭区域、中頭区域、那覇区域、島尻区域、宮古区域、八重山区域と6区域に亘り実施した。調査対象地域の抽出法は、各区域における主な方言発祥地の市町村を抽出し、その中から対象校を抽出するという層化多段抽出法によった。調査対象者数(有効票回答数)の内訳は表1の通りである。

表1 調査対象者数の内訳と性別構成

	男子生徒	女子生徒	無回答	合計
中学生	939人	946人	16人	1,901人
高校生	633人	819人	17人	1,469人

次に、調査対象者の出身地を以下の表2に、そして県外滞在経験の有無を表3に示す。出身地とは、これまでもっとも長く居住した場所のことをさす。表2を見ると、9割以上の生徒が沖縄県出身であり、大半を占めている。

表2 調査対象者の出身地別構成

	沖縄県	沖縄県外	海外	無回答	合計人数
中学生 (%)	1,787人 (94.0)	45人 (2.4)	1人 (0.1)	69人 (3.6)	1,901人 (100.0)
高校生 (%)	1,411人 (96.1)	25人 (1.7)	0人 (0.0)	33人 (2.2)	1,469人 (100.0)

表3 調査対象者の県外滞在経験の有無

	ない	ある	無回答	合計人数
中学生 (%)	1,622人 (85.3)	191人 (10.1)	88人 (4.6)	1,901人 (100.0)
高校生 (%)	1,298人 (88.4)	122人 (8.3)	49人 (3.3)	1,469人 (100.0)

表3に示した県外滞在経験の有無では、調査対象者の8割以上は沖縄県以外で1年以上暮らした経験がないことが分かる。

さらに、両親の子ども時代(5歳から13歳まで)の生育地を尋ねたところ、父親・母親のいずれも8割前後が沖縄県出身であった。つまり、調査対象者のうちの多くが沖縄県で育ち、両親の地理的背景も大半が沖縄県であることから、本調査結果は他府県である本土からの影響が少ない結果が得られると考えられる。

## 2.2 調査方法

本調査は、アンケート調査票を用いる方法で2004年9月に実施した。アンケート調査票は、30分前後で回答できるものとし、郵送調査法により行った。ただし、調査はクラスごとに教師の指示のもと実施する集団調査法を採った。

よって、回収率はほぼ100%であった。

前述した通り、日本語には多様な自称詞があり、同じ相手に対しても、必ずしも一つの語形のみを用いるわけではないことから、調査票の回答方法は、東京の中高生を対象にした大規模な人称詞研究である国立国語研究所編(2002)に倣い、想定した話し相手ごとに、掲げた語形全てに○(使う)か×(使わない)を付ける回答方法<sup>(2)</sup>を採用した。

待遇上の異なりを見る上では最も重要な要素となる話し相手であるが、相手の社会的な上下関係・親疎関係のみで語形を選択し使い分けているわけではないので、以下の表4で示した通り、大きく相手と場面による使い分けに区分し、相手の性や年齢による位相差、学校・学校外の場面における待遇上の上下関係と親疎関係に配慮し、[同性同級生]、[同性上級生]、[異性同級生]、[担任]、[年上家族]、[年下家族]の計6人を想定した。また、これらの対人関係における違いに加えて、場面の違いによる待遇差を調査するために、同じ相手に対する場面の改まり度の異なった「担任と授業中に話すとき」(以下、[担任授業中])と「担任と放課後に話すとき」(以下、[担任放課後])、さらに話し言葉と書き言葉の違いをみるために[作文]の場面を設定した。

表4 自称詞における想定した話し相手

【相手】	学校内の相手・・・[同性同級生]、[同性上級生]、[異性同級生]、[担任] 家庭内の相手・・・[年上家族]、[年下家族] 学校外・家庭外の相手・・・[見知らぬ人]
【場面】	改まった場面・・・[担任授業中]、[作文] くだけた場面・・・[担任放課後]

表5 自称詞における主な選択肢

1. ぼく、2. わたし、3. あたし、4. わたくし、5. おれ、6. うち、7. わん、 8. じぶん、9. わし、10. 自分の名前、11. 自分の名字、12. ニックネーム、 13. その他( )
--

表5の自称詞の選択肢については、中高生の自称詞を調査した先行研究(吉田1990、金丸1993、杉戸・尾崎1997、小林1997、国立国語研究所編 2002)で一般的に用いられるとされる主な自称詞に、琉球方言の一人称代名詞「わん」を加えた。さらに、相手が家族の場合は「親族呼称」の選択肢を追加した。

なお、回収された調査票は、全て統計解析プログラムSPSSとEXCELを用いてデータ作成し、統計的処理を施した。

### 3. 調査結果

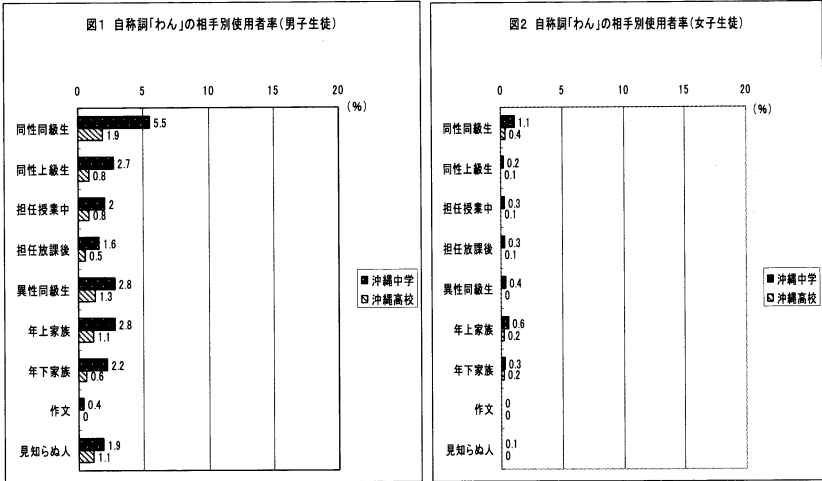
近年、日本語の男女差は以前に比べて縮まってきたという指摘が多い。しかし、それでもなお、「あたし」や「ぼく」といった自称詞の男女差は中高生といった若い世代においても、大きいと言われている(尾崎2001)。

一方、方言では男女共通の自称詞を使うところが多く、性差が小さいとされる(寿岳1979)。沖縄県も例外ではない。内間(1984)によると、琉球方言は大きく奄美・沖縄方言と先島(宮古・八重山方言)方言の二つに分かれ、沖縄本島を中心とする奄美・沖縄方言での自称詞は人称代名詞「わん」と所有代名詞「わー」の二種類であるという。「わん」は「私」を意味し、この一人称単数の人称代名詞には、共通語のような性差や敬語などによる区別はない(内間・野原編2006)。つまり、地域語社会においては、方言語彙を用いれば、その地域社会の一構成員というアイデンティティーが表明でき、なおかつ<女><男>といった性別によるアイデンティティーを表明したくない場合は、それを保留することもできると考えられる。

では、沖縄県の生徒は自称詞「わん」をどの程度用いているのだろうか。以下の図1と図2に「わん」の相手別使用者率を示す。

図1と図2を見て分かる通り、[同性同級生]に対して男子中学生の数値が5.5%と若干他より高いものの、全体的に使用者率は低い。つまり、方言語彙である「わん」は中高生の自称詞の言語資源として機能しているとはいえない。沖縄の方言は日本語のなかでも固有の方言を持っているがゆえに、ウチナーヤマトグチという標準語に近い地域語を母語とする若者には使いづらさがあるのかもしれない。ただし、先島方言を方言区域とする宮古・八重山

出身者についてはこの限りではない（参照 高橋2005b）。



さらに、高橋（2005a）では、沖縄県でかつて用いられていた琉球方言の人称詞についての認知度を尋ねた調査項目を設けたが、自称詞「わん」についての認知率は表6の通りであった。

表6 方言語彙「わん」についての認知率 (%)

	聞いたことがあり、使ったこともある	聞いたことがあるが、使ったことはない	聞いたこともなく、使ったこともない	無回答	合計
沖縄中学 (男子)	20.9	43.6	31.4	4.2	100.0
沖縄中学 (女子)	7.4	63.2	27.0	2.4	100.0
沖縄高校 (男子)	17.9	59.4	21.3	1.4	100.0
沖縄高校 (女子)	5.0	76.3	18.1	0.6	100.0

表6を見ると、どの属性についても「聞いたことがあるが、使ったことはない」という項目の選択率が最も高い。中学生と高校生を比べると、中学生

に「聞いたこともなく、使ったこともない」という選択がより多いことから、年齢が下がるにつれて方言の認知度も低くなっていると言える。

「わん」のみならず、琉球方言は現在の若者にはほとんど用いられておらず、現在の若者の多くは、標準語と琉球方言の中間言語、あるいは琉球方言の干渉を受けた標準語であるウチナーヤマトグチを用いる(永田1996)<sup>(3)</sup>。また、沖縄の方言に限らず、従来から社会言語学的研究において、方言は非標準的言語とみなされ、人種的あるいは社会的劣等性と結びつけられることが少なくない(トラッドギル1975)。ゆえに、ことさら「標準からの逸脱」を表明したいわけではなければ、沖縄の若者においても方言語彙の自称詞は用いづらいついかもしれない。

図1と図2で見たように大半の沖縄の生徒にとって、地域の方言語彙が自称詞の言語資源にないとすると、彼らは標準語を言語資源とする自称詞から選択するより他ない。東京を中心とした標準語圏の中高生を対象にした自称詞の調査研究では、男子生徒は、中村(2007)の言う<男性性>の強い「おれ」「ぼく」を主に使用すると言われている。国立国語研究所編(2002)の東京を中心とした調査結果では、「おれ」は使える相手と使いづらい相手が明確に区別されている一方で、「ぼく」は誰に対してもある程度使える表現とされる。

本調査での沖縄県の男子生徒による「おれ」と「ぼく」の相手別使用者率は以下の図3と図4の通りである。

なお、図3以下の自称詞については、語形が標準語であることから、標準語圏である東京出身者との違いが明確になるように、本調査がやった国立国語研究所編(2002)による東京の中高生を対象にした調査結果を併せて記載する。ただし、東京の調査については【担任放課後】【年上家族】【年下家族】【作文】の場面は想定されておらず数値がないので、図を見る際には注意されたい<sup>(4)</sup>。

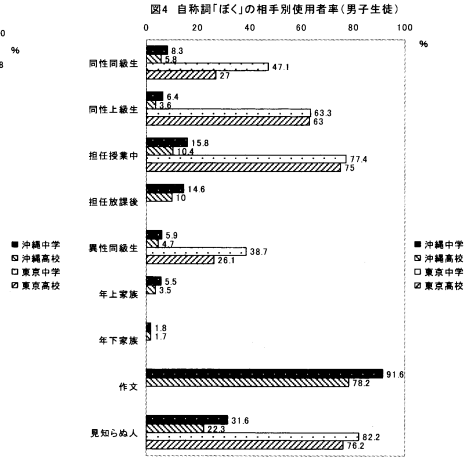
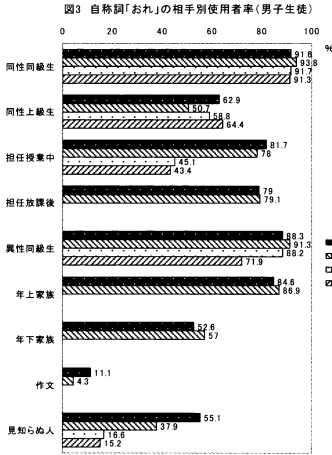


図3を見ると、標準語圏での調査結果とは異なり、沖縄県では「おれ」は【作文】を除き、比較的誰にでも使える表現であることがわかる。したがって、待遇表現として積極的に機能しているとは言いがたい。一方、「ぼく」は、おそらく学校教育で指導されているがゆえであろうが、書き言葉の言語資源としての要素が強い表現であることが分かる。

女子生徒については、紙幅の都合で図を掲載することができないが、「おれ」も「ぼく」も[同性同級生]に対する場合に最も使用者率が高いものの、女子中学生の「おれ」は4.7%、「ぼく」は1.0%、女子高校生の「おれ」は2.4%、「ぼく」は0.2%であった。つまり、標準語圏とは待遇表現としての機能は異なるが、「おれ」も「ぼく」も<男性性>が強い自称詞であるという点は、沖縄県も標準語圏と共通している。

次に、女子生徒の自称詞についてであるが、東京を中心とする標準語では「あたし」と「わたし」が最もよく使われており、待遇表現としては先ほどの男子生徒の「おれ」に相当するのが「あたし」、「ぼく」に相当するのが「わたし」と言われている(国立国語研究所編2002)。中村(2007)によると、「あたし」は<女性性>を最も強く表現する自称詞であり、「わたし」は男女両方が使えるものの、<大人の女性>を表現する自称詞とされる。



沖縄県の女子生徒の「あたし」と「わたし」の相手別使用者率は以下の通りである。

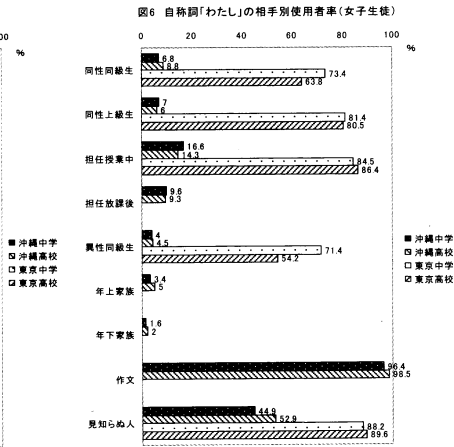
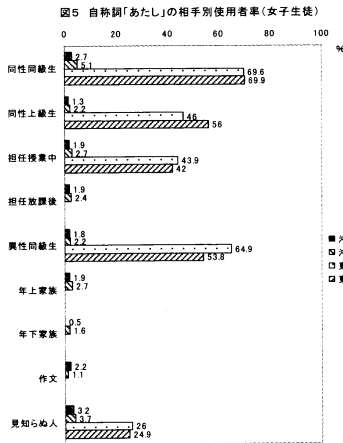
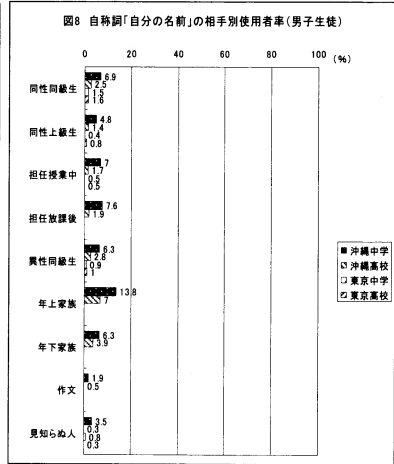
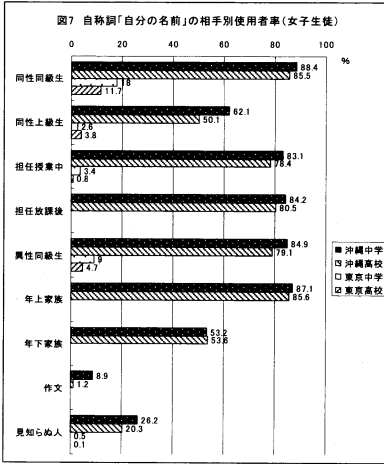


図5を見ると、「あたし」は沖縄県の女子生徒の言語資源としてはほとんど機能していないと言えるほど、低い使用者率である。一方、「わたし」についても、誰にでも使える表現というよりは、沖縄の男子生徒の「ぼく」と同じく、書き言葉としてのみ機能していると言える。「あたし」の使用者率の結果をみると、「あたし」は沖縄県では単なる標準語彙として認識されているわけではないと推察される。つまり、「あたし」は標準語圏のように単に＜女性性＞を表明する自称詞として認識されているのではなく、＜東京性＞という東京方言の意味合いが強いため、地域話者には選択しづらいのではなかろうか。事実、沖縄県の生徒に自称詞「あたし」のイメージを聞いてみると、「かっこつけてる気がする」「東京の人って感じ」「テレビの中のことば」と言った意見が多かった。

親しい関係性を示す「あたし」を用いないとすると、沖縄の女子生徒は親しい相手に対してどの自称詞を選択するのか。最も使用者率の高い「自分の名前」を以下の図7に示す。



「自分の名前」は、一般的に<子ども>を表明する言語資源として挙げられるが、図7を見ると、沖縄県においては、上下関係を問わず使われている。つまり、「自分の名前」の使用は単純に<子ども>を表明するというよりは、子どもではない中高生が使うことにより、「自分の名前」が表現している「幼稚な子ども」の部分を除象して、「親と子どもの関係性」、言い換えると、相手と甘えられる親しい関係を築きたいという気持ちの表れではなかろうか。それゆえに、図8で示した男子生徒の「自分の名前」の使用率の結果を見ると、他地域の男子生徒に比べ使用者率が高い。ただし、男子生徒の使用率は女子生徒ほど高くはなく、誰に対しても用いられているわけではないところを見ると、「自分の名前」と<女性性>の結びつきは弱くはないことが見受けられる。

以上、地域語主流社会であっても、標準語を言語資源とした自称詞を用いると、男子生徒は「おれ」「ぼく」、女子生徒は「自分の名前」「わたし」と、<男><女>と性別に結びついたアイデンティティーを表明する自称詞を主に使用していることが分かった。しかしながら、「おれ」「ぼく」「わたし」が地域を問わず、純粋な意味での「標準語」として意識されている一方で、「あたし」は一般的に標準語として位置づけられているものの、地域語社会からみると、単に標準語の「女ことば」ではなく、東京方言という地域語色の強

い言語資源であることが分かった。

では、性別によるアイデンティティを保留したい場合、沖縄県の生徒は自称詞として何を選択するのか。男子生徒の「おれ」と女子生徒の「自分の名前」に次いで、使用者率の高かった「じぶん」の相手別使用者率を以下に示す。

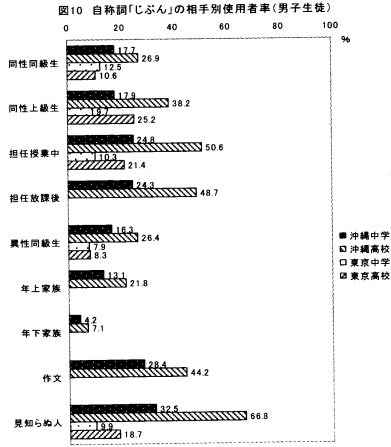
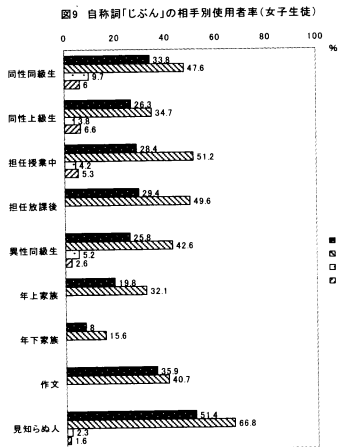


図9と図10を見ると、これまでの自称詞とは異なり、沖縄では男女ともに似通った用いられ方をしていることが分かる。

「じぶん」という語形は、もちろん方言語彙ではなく、標準語であるが、先行研究を見ると、これまで様々な捉え方をされている自称詞であると言える。保科(1910)では、小学校の国語教育で教授すべき自称詞として「わたくし」「わたし」「ぼく」と並べて「自分」を提示している。しかし、国語審議会で昭和27年(1952年)に提示された「これからの敬語」の建議書では、「じぶん」を「わたし」の意味に使うことは避けたいと述べられている。近年では、金丸(1993)が「じぶん」を男性専用語として紹介しており、「じぶん」の自称詞が多用される場として上下関係が厳しい警察や自衛隊などの職場を挙げているが、軍隊用語の連想から好まれないことも多いと報告している。さらに、国立国語研究所編(2002:36)では、図10で示した東京の男子高校生の結果を受けて、『「じぶん」』は上下関係の中でも特に先輩後輩という生徒同士の関

係において、男子の間で用いられる傾向を持つ丁寧な表現であるらしい。この表現は、かつては軍隊の用語として改まった場面でさかんに用いられていたものであるが、現在でも多少それに似た用いられ方がなされているかもしれない」と言及している。一方、沖縄の中高生の結果を見ると、男子のみならず女子も使用しているというだけでなく、ほとんどの相手に対してむしろ女子の使用率が男子を上回っている。つまり、「じぶん」は標準語では、近年<男性性>を表現する言語資源として位置づけられている向きがあるが、沖縄県では男子生徒のみならず女子生徒も共通して同程度使用しており、また比較的誰に対しても使用できる語彙であることから、語形は標準語であっても、性差のない方言語彙と同様に捉えられていると言えよう。

#### 4. おわりに

本稿では、標準語のみで語られることの多かった性差を示す「女ことば」「男ことば」の自称詞語彙について、地域語主流社会から再考することを試みた。

地域語社会では、その土地に由来からある方言語彙を用いれば、男女の別に関係なく、性別によるアイデンティティーを表明せずとも自身を自称することができるが、古くからの方言が使われなくなっている地域では、若者の方言語彙使用は「標準からの逸脱」あるいは方言語彙への特別な思い入れを示す行為と見なされ、ニュートラルな使用が難しい。そこで、標準語の自称詞から選択せざるを得なくなるのだが、本稿で見てきたように、その選択は標準語話者より容易ではない。<女性性><男性性>という性別に結びついた自称詞を選択する難しさだけでなく、ある特定の地域を想起させる自称詞の選びづらさが、特に地域語社会の女子生徒にはあることが分かった。

しかし、一方で、従来「男ことば」と言われていた自称詞を新たな地域語として創出できる可能性も見出すことができた。沖縄県では、自称詞「じぶん」は女子生徒の方が男子生徒より使用率が高いことから見ても、「男ことば」の借り物ではなく、男女ともに誰にでも使える語形として位置づけられている。おそらくこのような使用が続いていくと、「じぶん」という自称詞が沖縄

県の地域性を想起する言語資源として、日本語全体に認知される日も遠くはないかもしれない。また、自称詞研究を地域語にまで広げることによって日本語自称詞の多様性が再認識され、現在ある日本語自称詞における性規範を乗り越える原動力になることを願ってやまない。

【謝辞】 調査に協力してくださった皆様にお礼申し上げる。

#### 注

- (1) 本報告書では、沖縄県の中学校・高等学校の生徒のみならず教師についても調査を行っている。教師の調査結果については、高橋（2009）を参照されたい。また、調査項目についても本報告書では、自称詞のみならず呼称や意識調査などについても報告しているが、本稿では自称詞に焦点を当てていることから、それ以外の項目についての論及は避ける。
- (2) 本調査の予備調査として実施した高橋（2001）では、小林（1997）に倣い、想定させた話し相手ごとに最も使う人称表現と使うこともある人称表現を一つずつ選択させる方法を採用したが、その際、使うこともある人称表現をいくつか回答する回答者が出たことから、本調査では使用する全ての語形を選択させる国立国語研究所編（2002）の方法を採用することとした。
- (3) 永田（1996）では、「ウチナーヤマトグチ」を新方言と呼んでいる。
- (4) 国立国語研究所編（2002）による調査では、本稿で述べたように【担任放課後】【年上家族】【年下家族】【作文】の相手と場面が想定されておらず、【担任】に対しても授業中とは限定しておらず、単に「担任に対しての自称詞」を聞いている点が、沖縄県を対象にした本調査とは大きく異なる点である。

#### 参考文献

- 内間直仁（1984）『琉球方言文法の研究』笠間書院
- 内間直仁・野原三義編（2006）『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』研究社
- 尾崎喜光（2001）「学校の中での中学生の呼称」遠藤織枝編『女とことば 女は変わったか 日本語は変わったか』pp. 145-152 明石書店
- 国立国語研究所編（2002）『学校の中の敬語 1 アンケート調査編一』三省堂

- 金丸芙美 (1993) 「人称代名詞・呼称」『日本語学』5月臨時増刊号 pp. 109-119 明治書院
- 小林美恵子 (1997) 「自称の獲得 —高校生へのアンケート調査から—」『ことば』18号  
pp. 12-26 現代日本語研究会
- 寿岳章子 (1979) 『日本語と女』岩波新書
- 杉戸清樹・尾崎喜光 (1997) 「待遇表現の広がりとその意識 —中高生の自称表現を中心に—」  
『月刊言語』6月号 pp. 32-39 大修館書店
- 高橋美奈子 (2001) 「沖縄県における女子大学生の人称表現」『ことば』22号 pp. 78-90 現  
代日本語研究会
- 高橋美奈子 (2005 a) 『沖縄県における人称表現の実態調査』平成14年度・16年度科学研究  
費助成金 若手研究 (B) 成果報告書 研究代表者 高橋美奈子 課題番  
号 14710376
- 高橋美奈子 (2005 b) 「人称表現の使い分けに見られる待遇関係 —八重山区域の中学生を  
中心に—」『言語文化論叢』第2号 pp. 37-63 琉球大学言語文化研究会
- 高橋美奈子 (2009) 「沖縄県の学校場面における教師の呼称」『琉球大学教育学部紀要』第  
75集 pp. 195-205 琉球大学教育学部
- トラッドギル・ピーター (1975) 『言語と社会』岩波新書
- 中村桃子 (2007) 『<性>と日本語 ことばがつくる女と男』日本放送出版協会
- 永田高志 (1996) 『地球語の生態シリーズ 琉球編 琉球で生まれた共通語』おうふう
- 保科孝一 (1910) 『國語學精義』同文館
- 吉田裕久 (1990) 「学校における先生・子供の呼称」『日本語学』9月号 pp. 25-31 明治書院
- 渡辺実 (1996) 『日本語概説』岩波書店

(たかはし みなこ・琉球大学)